

Traditional Tales Stage 8 'How Anansi Got His Stories'

p. 2

大昔、すべての物語は、天空の神ニヤメのものでした。人々はニヤメのまわりに集まっては、1日中ニヤメの話に耳を傾けていました。くものアナンシは、そんなニヤメがうらやましくてなりません。みんながニヤメでなく自分のところに来て、話をきいてくれたらいいのと思っていた。

「ぼくはすべての物語を自分のものにしたい。物語の王になりたいのです！」

アナンシはそう言いました。

p. 3

それを聞いたニヤメは言いました。

「いいだろう。ただし、物語の王になるためには条件がある。私のところにこれから言う動物を連れて来るんだ——火のような針で敵を刺すスズメバチ、するどい牙を持ったヒョウ、それにおそろしい毒で相手をかみ殺すヘビ」

スズメバチもヒョウもヘビも、森の中で最も危険で、最もつかまえるのが難しい動物です。でもアナンシはどうしても物語の王になりたかったので、ニヤメの言うとおりにすることにしました。

「わかりました。やってみます！」

アナンシは言いました。

p. 4

アナンシは不安でした。「あんなおそろしい動物をつかまえて、ニヤメのところまで連れて行くなんて、いったいどうすればいいんだ！」アナンシは思いました。そして「ぼくは森で1番力が強いわけでもないし、1番^{どうもう}強^{どうもう}猛^{どうもう}でもない。勇気だってあまりないし……」とひとり言を言いました。

第2章

p. 5

そのとき、アナンシに良い考えが浮かびました。「そうだ！ぼくしか持っていない技と知恵と頭を使えばいいんだ！」アナンシはそう言ってニッコリ笑うと、

ひょうたんに水を入れに行きました。そして、スズメバチのいる巨大な木に向かって行きました。

p. 6

アナンシはまず、大きなバナナの葉にひょうたんの水を注ぎ入れました。そしてそのバナナの葉を頭にのせて、上から自分に水を浴びせかけました。

p. 7

アナンシの体から水がしたたり落ちました。次にアナンシは木に登って、スズメバチの巣よりも少し高いところでもとりました。そこでまたバナナの葉にひょうたんの水を注ぎ入れると、そこから巣の中に少しずつ水を落としていきました。すると、中にいたスズメバチはみんなびしょびしょになってしまいました。

p. 8

「雨だ！雨だ！」とスズメバチたちが騒ぎはじめました。

そこでアナンシは、「ほら、ぼくのひょうたんにおいで！雨宿りするといい」

と声をかけました。「ここなら大丈夫さ！」

スズメバチはびしょびしょになった自分たちの巣から一気に飛び出してきて……

p. 9

……からっぽのひょうたんに向かって一直線！

全部のスズメバチが入ったところをみはからって、アナンシはひょうたんの口にさっとバナナの葉をつめて、スズメバチが出られないようにしました。

「つかまえた！」アナンシは声を上げて喜びました。

第3章

p. 10

アナンシはニヤメのところまで走って行きました。

「つかまえました！」アナンシは歌うように叫びました。「スズメバチをつかまえました！自分の技ひとつでつかまえたのです。もうこれでぼくも物語の王になれますね」

「だが、おまえはまだヒョウとヘビをつかまえてはいない」ニヤメが言いました。「だからまだ私の物語を

やるわけにはいかん」

p. 11

「ああ、そうだった……」アナンシは思い出しました。「すっかり忘れるところだった。まだ“するどい牙を持ったヒョウ”と“おそろしい毒で相手をかみ殺すヘビ”をつかまえなければならないんだ。いったいどうしたらいいんだろう？ぼくは森で1番力が強いわけでもないし、1番^{どうもう}獯猛でもない。勇気だってあまりないし……」とひとり言を言いました。

p. 12

「そうか！またぼくの技と知恵と頭を使えばいいんだ！」アナンシはそう言って少し笑いました。アナンシは大きなスコップをとってくると、ヒョウがよく昼寝をしている木を探し出しました。

p. 13

その木からそう遠くないところに、アナンシはそうっと穴を掘りはじめました。どんどん深く掘って行くと、それは大きな穴ができあがりました。アナンシはその上から小枝や草などをかぶせておきました。夜の散歩にでかけようとしたヒョウが、背の高い草の間から姿をあらわしました。その拍子に、ヒョウは草木におおわれた穴の上に足を踏み出してしまったのです！

p. 14

ドッシーン！ヒョウの体が大きな音をたてて穴に落ちました。すかさずアナンシは大きなクモの巣を吐き出しました。

「今助けるぞ！」

アナンシは穴の底に向かって叫びました。

「このクモの巣にしっかりつかまるんだ！今引っぱり上げてやるから！」

「ああ、それはありがたい！」ヒョウはそう言って、アナンシのクモの巣にしっかりとつかまりました。ところがそのとたん、ヒョウの体はクモの糸にからまってしまいました。糸はどんどんからまって、やっと穴から出られたときにはヒョウはもう完全に動けなくなっていました。

「つかまえたぞ！」アナンシはうれしそうに笑いました。

第5章

p. 17

「おい、放せ！放せ！」ヒョウがうなり声をあげました。

「放すだって？」アナンシは鼻で笑いました。「君をつかまえるのに、どれだけ苦労したと思ってるんだ！」

「この、ペテン師め！」ヒョウがわめきました。「おれは最初からおまえの仕業だとわかってたんだぞ！」そんなことを言われてもアナンシはちっとも気にしませんでした。もう少しで栄冠を手にするのできるのですから！

p. 18

アナンシはニヤメの前にヒョウを引っぱって行きました。

「つかまえました！」アナンシは声高らかに言いました。「ヒョウをつかまえたのです！」

「しかし、ヘビはまだだ。物語はまだやるわけにいかん」

p. 19

「ああ、そうだった……」アナンシは思い出しました。「まだヘビが残っていた。あいつが1番危険なんだ！いったいどうしたらいいんだろう？ぼくは森で1番力が強いわけでもないし、1番^{どうもう}獯猛でもない。勇気だってあまりないし……」とひとり言を言いました。

p. 20

「よし！またぼくの技と知恵と頭を使えばいいんだ！」アナンシはそう言って、長い竹の棒と縄をとってきました。

p. 21

そしてヘビの家のそばを歩きながら、何かブツブツ言っておかしそうに笑いました。

「長くて強いかな、短くて弱いかな？うーん、どっちかな？どっちかな？」

アナンシは同じことを何度も言って歩きました。

p. 22

ヘビは、アナンシがブツブツ言いながら笑っているのを見て言いました。

「おい！おまえ、いったいどうしたっていうんだ？」

p. 23

「うん、今ちょっと考えてたんだ。きみがこの竹の棒より長くて強いのか、それとも短くて弱いのかってね」とアナンシは答えました。

「そんなの簡単さ。おれの方が長くて強いに決まっている。その竹を下に置いてみればわかるさ！」とヘビが言いました。

p. 24

アナンシは竹の棒をヘビの横に置きました。

「残念！きみの方が少しだけ短いようだね」するとヘビは怒って言いました。「ちゃんと体をのばせば、おれがどんなに長くて強いかわかるさ」そう言いながら、ヘビは体をいっぱいのにばしました。

p. 26

「問題はね」アナンシは言いました。「きみの体は、上にのばすと下の方が短くなっちゃうし、下を長くすると上の方が短くなっちゃうんだよ」

「それなら、おれの体を動かないように竹の棒にしばりつけろ」

p. 27

「なるほど、そりゃあ良い考えだ！」アナンシはそう言ってから、ヘビにわからないようにそっと笑いました。

p. 28

そこでアナンシはヘビの体が動かないように竹の棒にしばりつけました。

p. 29

「そら、言った通りだ！おれはこの竹より長くて強いだろう！」

ヘビがそう言うと、アナンシは笑いました。

「とんでもない！きみは弱くて短くて大ばかもの

さ！」

p. 30

アナンシはヘビをニヤメのところに連れて行きました。

「つかまえました！」アナンシは声高らかに言いました。「ヘビをつかまえたのです！」

「そうだな」ニヤメは言いました。「よくやった」

p. 31

「この上は私も約束を守らねば……。それでは本日より、全ての物語はおまえのものとする。おまえは“物語の王アナンシ”となるのだ！」

「これでみんなぼくのことを認めてくれるぞ！」
こうして、アナンシは全ての物語を手に入れたのです。

Traditional Tales Stage 8 'Finn MacCool'

第1章

p. 2

はるかむかし、アイルランドにフィン・マックールという巨人が住んでいた。背は樫の木よりも高く、力は12頭の雄牛にも勝っていた。フィンには心が優しくて勇敢だったが、プライドもかなり高かった。

「私が最も偉大な巨人だ！私にかなうものはいない！」フィンをよくそう言って自慢した。

p. 3

海を渡ったスコットランドにも別の巨人がいた。その名をアンガスと名乗った。アンガスも体が大きくて強かったが、顔がいつも怒ったように真っ赤だったので、人々から恐れられていた。

ある日アンガスは、フィンが「自分が最も偉大な巨人だ」と自慢しているといううわさを耳にした。アンガスは烈火のごとく怒り、「最も偉大な巨人はこの俺様だ！」と言ってどなった。「2度とそんなことが言えないようにこらしめてやる！」

p. 4

アンガスは怒りに燃えながら海岸までドシンドシと歩いて行った。そして海の向こうのアイルランドを見せると、口に手をあてて大声でどなった。

「おい！フィン・マックール！ほんものの巨人がどんなもんか見せてやる！この図体だけでかい赤ん坊め！」

p. 5

アンガスの声は風によってフィンのところまで届いた。これを聞いたフィンも頭に来て、アントリムのがけに立つと、こう言い返した。

「ここから見えるのはまぬけな巨人だけだ！」

p. 6

アンガスは怒りにふるえた。

「この海さえ渡れば、うんところしめてやれるものを！」アンガスがそう叫ぶと、

「そんなことは簡単だ！」フィンはそう言って、がけを割ってそれを海の中に投げつけ始めた—これが「巨人の石道」の最初の石である。

p. 7

アンガスも同じことを始めた。こうしてお互いの距離がだんだん近づくにつれて、フィンは心配になってきた。もうかなり疲れていたし、アンガスがとてつもなく大きくて強そうに見えたのである。

p. 8

そこでフィンは急いで妻のウーナのところへ帰った。ウーナはフィンのように大きくも強くもないけれど、とても頭のよい人だった。フィンはアンガスのことや石のかけ橋のことをウーナに話した。それを聞いたウーナはため息をついて言った。

「フィン。あなたは大きな赤ん坊になるのよ」

「とんでもない！」フィンが言った。

p. 9

ウーナは赤ん坊がかぶる帽子をフィンにかぶせて、「ほら、これでいいわ」と言った。そしてフィンにパジャマを着せると、ふろおけを使って大きなベビーベッドを作った。「さあ、ここに横になって」とウーナが言った。「アンガスのことは私にまかせてちょうだい」

p. 10

それからまもなくして、ドンドンと扉をたたく大きな音がした。ウーナが扉を開けると、そこにはアンガスが立っていた。アンガスの顔は怒りで真っ赤になっていた。

「おれはフィンに会いに来た」アンガスはどなった。ウーナはやさしくほほ笑んで言った。

「どうぞ入ってください。フィンは今狩りに出かけてますけど、すぐに戻ってくるわ」

第2章

p. 11

「あなたはフィンのお友だちですか？」ウーナが聞いた。

「ちがう」ぶっきらぼうにアンガスが答えた。「俺様の方が強いことを証明しに来たんだ」

「まあ、ほんとに？」ウーナが驚いたように言った。

「あなたのように小さな方が？」

「小さいだと？」アンガスがムツとして言った。「俺様が1番大きいんだぞ！」

p. 12

ウーナはもう1度ほほ笑んだ。「失礼だったらごめんなさい。でも、あなたはどうみてもうちのぼうやと比べても大きいとは言えないもの」ウーナがベビーベッドの方を見た。そこには心配そうに目を見開いているフィンが入っていた。

「バブー」とフィンが言った。

「なんと！こりゃあ大きな赤ん坊だ！」アンガスが言った。

「そうでもありませんわ。あの子の父親の大きさを思えばね」

p. 13

今度はアンガスが心配になってきた。子どもがあんなに大きいなら、フィンはもっと大きいにちがいない！

「だが」アンガスは言った。「いくら大きくても、俺様ほど強くはないだろうな！」

p. 14

「それはよかったわ」ウーナが言った。「ちょうどやってほしいことがあったの。あなたがフィンよりも強いなら、きっと簡単にやったださるでしょうね」

「あたりまえだ」

「うれしいわ。そうしたらこの家をぐるっとまわしてくださいませんか」

アンガスは目を見張った。「家をまわす？」

「ええ、そうですよ。フィンはいつもこの時間になると家をまわしてくれるの。そうするとドアの方からも

太陽の光が入るでしょう」

p. 15

アンガスはびっくりして息をのんだが、しかたなく外に出て家を抱え込んだ。

それからありったけの力をふりしぼって家を持ち上げると……

……ゆっくりゆっくり、家をまわし始めた。

p. 16

ベビーベッドの中で、フィンは家が動いたのがわかった。そして心配そうに親指を吸いながら、こんなことができるなんてアンガスはかなり力が強いにちがいないと思った。

p. 17

とうとう、アンガスは家をまわすことに成功した。

「どうだ！」アンガスは誇らしげに言った。

p. 18

「すごいわ」ウーナは言った。「ただ、フィンはもっとはやくまわせるけど……」

アンガスの顔が曇った。

「でも、あなたのような小さな方にしてはすばらしかったわ」ウーナはさらに続けた。「さあ、疲れたでしょう。中に入って何か少し召し上がってくださいな」

第3章

p. 19

アンガスは家の中に入って席についた。ウーナがケーキを運んできた。できたばかりのケーキはまだほかほかと温かかった。

「いかが？」ウーナは言った。「フィンの大好物ですよ。大変な仕事をしたあとはこれに限るって」

p. 20

「それはどうも」そう言ってアンガスは、大きな口をあけてパクリとケーキにかぶりついた。まさかウーナがこの中に石を入れて焼いたとも知らずに……。

「うっ！痛い！！」アンガスが叫んだ。
「どうしました？」ウーナが聞くと、
「おまえのケーキを食べたら、歯が折れてしまったじゃないか！」とアンガスはうめき声を上げた。

p. 22

「まあ、ほんとうですか？あなたの歯はきつととてもやわらかいのね。フィンはこのケーキが大好きですよ。うちのぼうやもね」
ウーナはそう言いながら、フィンにケーキを持っていった。もちろん、そのときには石が入らないように気をつけて渡した。フィンはそれをたった3口で食べてしまった。
「もっともっと！」フィンは言った。「ママ、もっともっと！」
アンガスは目を見張った。

p. 23

「おまえの赤ん坊はずいぶんと歯が丈夫なんだな！」
「そうでもありませんわ」ウーナは笑って言いました。
「あの子の父親の歯の強さを思えばね。ちょっと触ってみますか？」

p. 24

アンガスが赤ん坊の歯に触ろうとして、フィンの口の中に手を入れると……

p. 25

……フィンが思いっきりアンガスの手にかみついた。アンガスはあまりの痛さに悲鳴をあげた。

p. 26

ちょうどそのとき、「あら、フィンが帰ってきたみたい」とウーナが言った。
アンガスの赤い顔が真っ青になった。赤ん坊がこんなに強いのなら、フィンはもっともっと強いにちがいない。
「もうそんな時間か？」アンガスは言った。「悪いが、もう行かなければ……」

p. 27

「アンガス、パパとケンカ」フィンが言った。
「それはまた今度だ」アンガスが言った。
「アンガス、ぼくとケンカ」フィンはそう言って、ベビーベッドから飛び出した。

p. 28

「これはたまらん」と、アンガスは背中を向けて逃げ出した。
「助けてくれ！バカでかい赤ん坊が追ってくる！」

p. 29

アンガスはそのままスコットランドまで走り続けた。途中、フィンでも赤ん坊でも、とにかく絶対についてこられないようにするため、石の道を壊しながら走った。

p. 30

それを見たフィンとかしこいウーナは腹をかかえて笑った。アンガスはもう2度と、この強大な敵フィン・マックールを探しに海を渡ってくることはないだろう。

p. 31

今でもアイルランドのアントリム州に行くと、アンガスが残した石道の名残を見ることができる。そこは『巨人の石道』と呼ばれて、世界有数の謎の1つに数えられている。

Traditional Tales Stage 8 'The Tale of Little Red Riding Hood'

第1章

p. 2

「ねえ、お母さん、もう行ってもいいでしょう？」赤ずきんがふくれつつらをしています。赤ずきんは今、お母さんと一緒に住んでいる小さな家の玄関に立っています。「早くしないと遅れちゃう。おばあちゃんと約束したのよ。お茶の時間に間に合うように行きまですって」

p. 3

赤ずきんはかなりイライラしていました。もう、お母さんたら、ほんとうにいやになっちゃう！もう何か月もかかって、やっと1人でおばあちゃんの家に行ってもいいって説得したのに……。今になってまた考え直してるみたい。

p. 4

「ほんとは行かせても大丈夫かしらねえ……」お母さんは言いました。「だって、森の中には危険がいっぱいあるのよ。何があるかわかったものじゃないわ」

p. 5

赤ずきんはため息をつきました。
「もうその話は何度もしたじゃない。絶対に気をつけるから。携帯電話だって持ってるし」

p. 6

「そうねえ……」お母さんは何かブツブツと言っていました。ついに「わかったわ。じゃあ行ってもいいわ」と言いました。「だけど、おばあちゃんのうちについたらすぐ電話するのよ」
「もちろんよ！」赤ずきんは道を駆けだしました。お母さんが手をふると、赤ずきんも手をふってそれに応えました。

p. 7

でも森の中に入ってお母さんから見えないところまで来ると、赤ずきんは「やったー！！！」と叫んで、空に向かってこぶしを振り上げました。

第2章

p. 8

赤ずきんはせっかく1人で出かけるのだから今日は思いっきり楽しもうと心に決めていました。お母さんが用意してくれたおみやげのバスケットをゆらしながらこうして1人で森を散歩していると、赤ずきんはもう自分が小さな子どもじゃないんだという気がしてきました。ところがその時、赤ずきんの行く手に突然黒い人かげがさしかかりました。赤ずきんは足をとめました。

「やあ、お嬢さん……」その人は言いました。とても低い声でした。「きみは誰かな？」

p. 10

赤ずきんがふりかえると、そこには全身毛だらけの大きな人が立っていました。どこかで見たような気もするけど……でもその時はわかりませんでした。

p. 11

「私は赤ずきんです」とていねいに答えてから、赤ずきんはふとお母さんに言われたことを思い出しました。「あの……知らない人と話してはいけないことになっているんです」

「そりゃあ、もつともだ」その人はほえるように言いました。「きみはなんとかしこい子なんだろう！もうきみの散歩のじゃまはしないよ。どこかいいところに行くんだらうね？」

「おばあちゃんのところまでちょっと。森の反対側にある小さなおうちに住んでるの。早く行かなくちゃ！じゃあね！」

p. 13

赤ずきんは急ぎました。ちょっとふりかえって見てみると、驚いたことにあの毛だらけの人の姿はもう消え

ていました。とても良い人に見えたけど、でもなんだか嫌な感じ……赤ずきんは思いました。

その時ふと赤ずきんは思い出しました。あの全身毛だらけの人は……そう、「悪いオオカミ」だわ！お母さんが前にパソコンで見せてくれたじゃない！ああ、すぐに気がつくべきだった。ふうっ！危ないところだったわ。

p. 14

でもなんですぐにおそってこなかったのかしら？近くできこりの人が木を切っていたから、やめておいたのかもね。トラックもあったし、それにあのきこりの人、おのをを使うのが上手そうだったし……。

赤ずきんは、このきこりの電話番号を携帯電話に登録しておいた方がいいと思いました。「いつ役に立つかわからないものね」赤ずきんはつぶやきました。

p. 15

そのうちに赤ずきんは悪いオオカミのことなんかすっかり忘れて、散歩を楽しんでいました。ポカポカとあたたかい日ざしの中を1人で歩くのはステキでした。ときには立ちどまって、おばあちゃんにあげようと野の花をつんだりもしました。

第3章

p. 16

しばらくして、赤ずきんはおばあちゃんの家に着きました。ノックしようとする、すでにドアは開いていました。

おかしいな？おばあちゃんが赤ずきんのために開けておいてくれたのでしょうか？

p. 17

「こんにちは、おばあちゃん！」赤ずきんは大きな声で言いました。「おいしいものを持ってきたわよ！」すると低い声で返事がありました。「まあ、いらっしやい、赤ずきん！私はこっちよ。寝室にいるの」

p. 18

赤ずきんは寝室のドアのところに立ちどまって、中をのぞいてみました。するとおばあちゃんのベッドにだれかが寝ていました。おばあちゃんのナイトガウンを着て、おばあちゃんのナイトキャップをかぶっています。でもそれはおばあちゃんではありませんでした。それは……あの悪いオオカミだったのです！

「そんなところに立っていないで」オオカミはどなるように言いました「中におはいいり！」

p. 19

いろんなことがいっぺんに赤ずきんの頭の中を駆けめぐりました。オオカミはおばあちゃんにいったい何をしたのかしら？大体オオカミがここにいるのは、考えてみれば赤ずきんのせいです——だって、おばあちゃんの家がどこにあるか詳しく話してしまったのは赤ずきん本人だったのですから。

p. 20

そして今度は赤ずきんにも大変な危険がせまってきました。「あんまりだわ……」赤ずきんは思いました。はじめて1人で出かけた日に、いきなり最悪の結果を迎えるなんて……。

p. 21

きっとみんな私のことを「オオカミに食べられた少女」なんて呼ぶんだわ。そして「むかしむかし、赤ずきんちゃんはおばあさんの所へ行く途中で悪いオオカミに出くわして、それからずっと幸せに暮らさませんでした……」なんて話すのよ。

p. 22

今すぐ何とかしなきゃ……でもいったいどうすればいいの？ふとそのとき、お土産のバスケットに目をやると、中に携帯電話がちょこんと入っていました。

「あのう……おばあちゃん、少し待っていてくれる？ちょっとやらないきゃならないことがあるの……」

p. 23

オオカミは驚いたように赤ずきんを見つめました。
赤ずきんはニコニコしながら部屋の外に出ると、携帯電話でショートメールを送りました。

第4章

p. 24

悪いオオカミがベッドから出てきて、赤ずきんの方へにじり寄って来ました。

「あの……おばあちゃん、おばあちゃんの耳はなんて大きいのかしら」時間を稼ぐために赤ずきんは言いました。

「おや、そうかい？」オオカミがどくなりました。「おまえの音がよく聞けるようにさ」

p. 27

「ああ、そうね。それに、えーと、すごく大きな目をしてるのね、おばあちゃん」

「おまえをよく見るためだよ」オオカミがまたどくなりました。言いながらオオカミはじわりじわりと赤ずきんの方にやってきました。どんどんどんどん近づいてきます……

p. 28

「あ、それから、それから、おばあちゃんの歯はなんて大きいのかしら」赤ずきんが言うと、「それはね……おまえをガブリと食べるためさ」オオカミはそう言って、赤ずきんにおそいかかりました！その時です。だれかが寝室の窓を割って入って来ました。

p. 29

それはもちろん、あのきこりでした。きこりは部屋中オオカミを追いまわしました。そして、オオカミはついにキャンキャンと悲鳴を上げて窓から飛び出すと、いちもくさんに逃げて行きました。

p. 30

おばあちゃんは洋服ダンスの中でしばられていました。どこにもけがなどはありませんでしたが、ちよっ

とショックを受けているようでした。

一方、赤ずきんはというと、これからもっとたくさん1人で出かけられると思ってワクワクしていました。結局なんとかうまく乗り切ったんだから……そうでしょう？

p. 31

でもまあ、お母さんが「うん」とは言わないわね……。

Traditional Tales Stage 8 'Twelve Dancing Princesses'

第1章 穴のあいたブーツ

p. 2

トランパーのブーツには穴があいていました。そこから石だたみの道がじかに足に伝わってきます。風で飛んできた新聞紙を拾い上げると、トランパーは腰をおろしてその紙でブーツの穴をふさぎました。

あるひとりのかよわいおばあさんが、トランパーをにらみつけながら言いました。

「あんた、くつで苦勞しているのは自分だけだと思ってるんだね！ だけど、王様のとこじゃ、12人の娘がそろいもそろってみんな靴に穴があいているそうだよ！」

p. 3

よく見ると、そのおばあさんは裸足でした。あちこち切り傷もありましたし、寒さで足が紫色になっていました。気の毒になったトランパーは、自分の古ぼけたブーツをそのおばあさんにあげました。お礼だと言って、おばあさんはうすよごれたマントをくれました。そして大きな靴音をひびかせて立ち去っていました。歩きながらおばあさんは大きな声で言いました。

絶対に眠るな

一滴も飲むな

ひと口もすするな

ひとなめもするな

「さよならのあいさつにしちゃあ、変わってるな」トランパーは思いました。

第2章 謎

p. 4

雨がポツポツとふってきました。トランパーはマントをはおって、しめった新聞紙の切れはしに目をやりました。手にとるとやぶけてしまいましたが、なんとか読むことができました。そこにはこんなことが書いてありました。

王宮からのお知らせ

募集：

ボロボロの靴の謎を解ける人。

報酬：

王女との結婚。

注意：

失敗した者は投獄される。

p. 5

「これはいいぞ！」トランパーは思いました。

「きっとぼくが謎を解いてみせる。どうせ失うものなんか何もないんだ。ブーツだってもうないんだし…」そう言って自分の足元を見ると、なんと、トランパーの足も消えてなくなっていました。足ばかりでなく、体も全部消えてしまいました。トランパーの体は透明になっていたのです。

「これは魔法のマントなんだ…」

そう言ってトランパーは息をのみました。

p. 6

謎の原因は王様の12人の娘たちでした。王女たちは全員、寝る前には絹の靴をぬいでベッドに入ります。それなのに、朝起きてみると必ず靴がボロボロになっていて、しかも王女たち全員が疲れ果てて寝ているのです。

p. 7

いったいどうしたことでしょう？ 王女たちの部屋には鍵がかかっている、外に出て行くことはできません。それなのに、なぜこんなことが毎日続くのでしょうか？ 王様の全財産は今や王女たちの靴に費やされていたのです！

p. 8

この謎を解くために、方々から王子たちが集まって来ました。どの王子も、王女たちが寝ているすぐそばで見張りました。眠気覚ましに、自分はどの王女と結婚したいかなどと考えたりもしていました。それなのに、朝氣がつくとみんな長いすに横になって寝ているのです。あたりには、ぐっすり眠っている王女たちと24個のバラバラの靴がちらばっていました。こんなことが3度ずつ繰り返されたあげく、みんな牢屋に入れられてしまいました。

p. 9

王子たちが来なくなると、今度はたくさんの騎士がやって来ました。続いて地方の地主もあられました。だれもが、絶対に謎を解くんだと心に決めてやって来るのですが、成功した人はひとりもいませんでした。王様は怒り狂いました。毎日毎日新しい靴を買わなければならない、牢屋は王子や騎士や地主たちではち切れそうです。でもトランパーはそんなことは全く知りませんでした。

p. 10

トランパーはお城に行って、王様の前に立ちました。「おまえは靴もはいていないのか!？」王様は吐き出すように言いました。「王様も靴のことで毎日お困りのようですね」トランパーは言いました。

第3章 眠る王女たち

p. 11

王女たちはみんなとても親切でした。「勇敢なお方にはおいしいものをさしあげなくちゃね」そう言って、トランパーにベーكد・サーモンとミルクを持ってきてくれました。トランパーはサーモンは食べましたが、あのおばあさんの忠告を思い出してミルクは1滴も飲みませんでした。かわりにそのミルクをこっそりとネコに飲ませました。するとネコは「にゃあ」と鳴いたかと思うと、窓枠にもたれかかってぐっすりと眠ってしまいました。「なるほど、そういうことだったのか!」トランパーは思いました。

p. 12

王女たちがベッドに入りました。トランパーは長いすに横になると、わざと大きないびきをかいて寝たふりをしました。その夜遅く……遠くから耳慣れない音楽が聞こえてきました。すると王女たちは全員ベッドの中から飛び出してきて、真新しい靴にさっと足を通すと、なんと、洋服ダンスの中に入っていったのです!

p. 14

王女たちはぶら下がっている服の間をかき分けるようにして中に入って行きました。その先には通路があって、王女たちがそこを駆けてぬけて行きます。トランパーは、おばあさんにもらった魔法のマントを頭からかぶって、あとを追いました。王女たちはルビーのバラ園とダイヤモンドの果樹園を通り抜け、ガラスの階段をのぼりました。その先にあったのは、それはそれは美しいお城でした。トランパーは王女たちのあとについて入って行きました。

p. 15

王女たちはくるくると舞いながら大広間へと進みました。そこでは、12の人影が王女たちを待っていました。それは妖精でした。トランパーは妖精と王女たちが踊るところをじっくりと観察しました。すると、妖精の靴はかたくてしっかりしているのに比べ、絹の靴底はやわらかいのですぐにすりへってしまうことがわかりました。「なるほど、そういうことだったのか!」トランパーは言いました。

p. 16

夜明け前になると、踊り疲れた12人の王女たちはボロボロの靴のまま寝室に戻りました。トランパーは先に部屋に戻って、長いすに横になっていました。そこへ王様がやってきました。ちらばったボロボロの靴の中で、大きないびきをかいて寝ているトランパーを見た王様は言いました。「それで?」

p. 17

トランパーは今見てきたことをすぐに王様に話したのでしょうか。いいえ、そうではありませんでした。トランパーは前の日に食べたサーモンのおいしさが忘れられず、またごちそうを食べたいと思ったのです。「あと2回だぞ」王様は言いました。「それで終わりだ!」

第5章 チャンスはあと2回

p. 18

次の日の夜、王女たちは七面鳥の肉とお茶を運んできました。トランパーは七面鳥は丸のみにしましたが、お茶は「一口もすすり」ませんでした。代わりに宮殿で飼っているオウムにお茶をやりましたが、オウムは止まり木からすべり落ちて、ぐっすりと眠ってしまいました。

p. 19

そしてまた王女たちもトランパーも眠りました——いいえ、眠ったように見えました。

p. 20

その夜遅く……遠くから美しく澄んだ音色が聞こえてきました。すると王女たちは全員ベッドの中から飛び出して、洋服ダンスの中に入って行きました。王女たちはルビーのバラ園とダイヤモンドの果樹園を走り抜け、ガラスの階段をのぼってお城に入って行きました。トランパーも魔法のマントを頭からかぶってついて行きました

p. 21

その日も妖精たちが待っていました。そして、王女たちは靴がボロボロになるまでずっと踊り続けました。

p. 22

夜明け前になると、疲れ果てた12人の王女たちは寝室に戻りました。トランパーは先に部屋に戻って、長いすに横になりました。

p. 23

そこへ王様がやってきました。ボロボロの靴の中で、大きないびきをかいているトランパーを見て王様は言いました。

「それで？」

トランパーは見てきたことをすぐに王様に話したでしょうか？いいえ、やはり今度もそうではありませんでした。トランパーは前の日に食べた七面鳥のおいしさが忘れられず、またごちそうを食べたいと思ったのです。

「チャンスはあと1回だぞ」王様は言いました。「……ところで、このオウムはいったいどうしたのだ？」

p. 24

次の日の夜のごちそうは、チキン・パイと水でした。トランパーはパイをごくりとひと飲みになりましたが、水は一口もすすりもしなければ、なめもしませんでした。

p. 25

代わりにその水をかびんに入ると、バラの花が眠たそうに下を向いてしまいました。

p. 26

そしてまた王女たちが眠りました——いいえ、眠ったように見えました。その夜遅く……遠くからまた音楽がかすかに聞こえてきました。王女たちはベッドから飛び出して、靴をはき、洋服ダンスの中に入って行きました。そして、ルビーのバラ園とダイヤモンドの果樹園を通って、お城の階段をのぼりました。

p. 27

お城の大広間ではやはり妖精が待っていて、王女たちは疲れ果てて、靴がボロボロになるまで、ずっと踊り続けました。この日はついにトランパーも踊りに加わりました。

p. 28

「これで終わりだ」

翌朝、王様がやってきて言いました。トランパーは長いすでぐっすりと眠っていました。トランパーのまわりには、12足のボロボロの靴がちらばっていました。

p. 29

トランパーは魔法のマントをかぶって、その場から逃げだしたのでしょうか？いいえ、そんなことはありませんでした。それでは、誰にも信じてもらえないような話を王様に打ち明けたのでしょうか？そのとおり。トランパーは全て正直に話しました。

「私は王女様方のあとをつけました。王女様方は、洋服ダンスを通り抜け、ルビーのバラ園とダイヤモンド

の果樹園の先にあるお城で、不思議な妖精たちと靴がすりきれるまで踊っていたのです」

p. 30

「そんなのうそだわ！」王女たちが叫びました。

「なんとくだらないことを！」王様もそう言いました。

「証拠をお見せしましょう」トランパーはそう言って、ポケットの中からルビー色のバラを1本と、ダイヤモンドのように輝くなしの実をひとつ取り出しました。

「さあ、王様、この洋服ダンスの扉にくぎを打ってさしあげましょうか？さもないと、また王女様方は踊りに行ってしまいますよ」

p. 31

「なんと頭の良いやつだ！」王様はうなりました。

「1番年上の娘と結婚するがよい。そしていずれおまえは王になるのだ！」

でもトランパーは1番年下の王女を選びました。この王女が1番踊りがうまかったからです。

結婚式では、みんな裸足になっていつまでも踊り続けました。そして踊りが終わると、人々は絹の靴をはいて帰って行きました。誰もがほんとうに幸せそうでした。